

# Estuary English

津 熊 良 政

## Abstract

いわゆる Estuary English (以後 EE と略す) と呼ばれる標準英語アクセントの変種は、ロンドンを中心にその勢力を幅広く拡張し続けている。ロンドンの Cockney アクセントや英国南東部アクセントなどの混合アクセントの特徴を持つとされる EE の普及は、近年イギリスにおける教育改革、交通機関の発達、ロンドン発信型イギリス文化の固定化、階級社会の衰退、階級や職業などの社会流動性などが理由と考えられる。このようなイギリスの標準英語アクセントの変化は、何も今に始ったことではなく、少なくとも 500 年前から起こり続けている現象であると主張する研究者もいる。独特な語彙の選択の他に、EE の主な音声特徴としては、子音では、/t/ の声門閉鎖化、/l/ の母音化、/j/ の脱落・結合同化、/h/ の脱落、/θ, ð/ から /f, v/ への変化、/r/ から /w/ への軟口蓋化などが挙げられる。一方母音では /i/ および /e/ への変化、2 重母音のシフトなどが観察されている。

## はじめに

Estuary English とは、1984 年に、David Rosewarne (1984, 1994) によって造り出された造語で、ロンドンテムズ川とその河口沿地域で使われている標準英語アクセントの変種を意味し、主に、従来の Received Pronunciation (以後 RP と略す) と呼ばれている英国南部の教養ある人々が喋るとされる別名 BBC アクセントや、ロンドンの労働者階級が喋る Cockney アクセント、さらに英国南東部英語アクセントなどの混合であると定義されている。Rosewarne によれば、イギリスにおいて、従来の英語アクセントの権威であった RP が、徐々にロンド

ンを中心とする地方アクセントと融和して形成されたのが EE であり、特に Essex や Kent など広範囲の中若年層に浸透しているとする。また、かつて RP の領域とされていた金融ビジネス街 The City においても、「Customer-friendly」な EE が使用されるようになってきたらしい。

本稿では、EE に関して報告されている情報から、特にその言語現象拡大の要因と英国社会の反応、さらに発音上の特徴について考察したい。

## アクセントとダイアレクトの区別

まず本稿で取り扱う「アクセント」とは、1 言語の発音分野のみの特徴であり、便宜上「ダイアレクト」と区別する。「ダイアレクト」とは、通常、統語や語彙等の特徴をも含むその言語全体の異形・変種を意味する。Crystal (1995) の専門的 (言語学的) な定義によると、「アクセントは、系統的に用いられる音声・音韻のパターンと単位 (音素や音節等) のことで、各アクセントによって一定のパターンが存在する。一方、ダイアレクトは、もっぱら文法、語彙中心の問題を扱う。その意味で、アクセントとは狭い範囲での発音異形学と言える。」としている。

## EE 考察のための参考資料

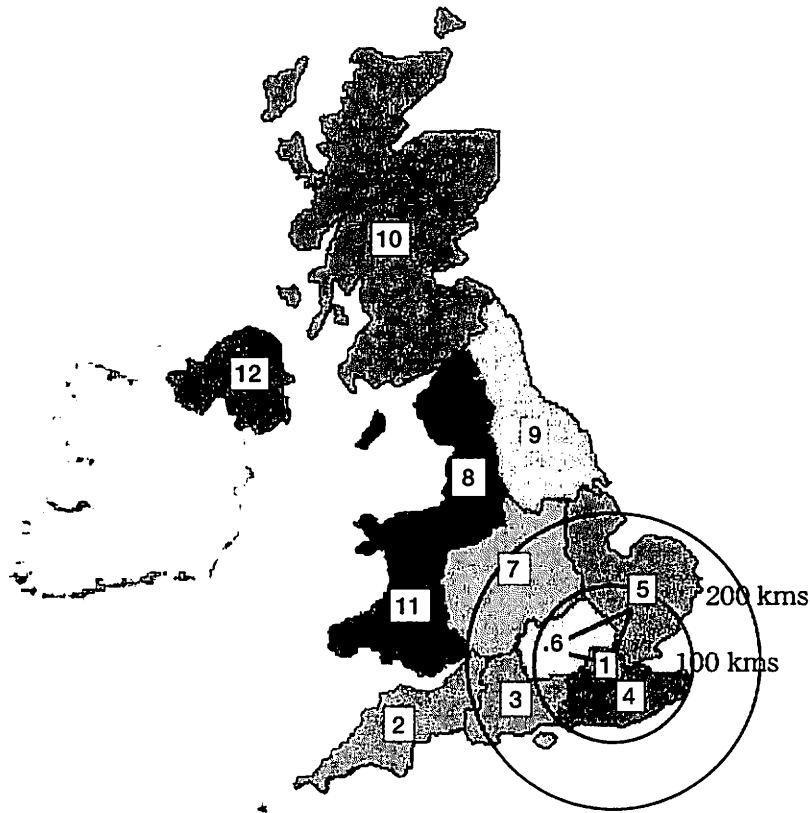
<[www.phon.ucl.ac.uk/home/wells](http://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells)>

現在、イギリスで最も注目されているアクセントと言っても過言ではない EE については、それ自体の存在の是非を議論するほど賛否両論が分かれている。1984 年以來、多くのイギリスの全国版新聞などの教育欄や文化欄で扱ってこられたが、EE について科学的手法で集められたデータの量が少ないため、議論も主観的になりやすい。しかし、インター

ネットの普及のおかげで、EEに関する資料を包括的に提供してくれるWebsiteがある。University College of Londonの音声学部教授J.C. Wellsが、この多大な時間とエネルギーを要するサイトの維持管理をしている。そのカバーする数多い参考資料は、EEに関する出版書籍、発表論文、新聞記事、セミナーでの発表原稿、ネット上での議論集にまでおよび、そのデータは絶えず更新されている。

### EE 圏拡大の要因

伝統的には、イングランドの主なダイアレクトは、8・9番エリアをNorthern, 2・3番エリアをSouthern, 4番エリアをKentish, ロンドンを含む1・5番エリアをEast Anglia, 6・7番エリアをEast & West Midlandダイアレクトと区分されてきた(Crystal 1997)。そして、London・Cambridge・Oxfordの3点を結んでできる三角形を「East



1. Greater London
2. South West (Avon, Somerset, Devon, Cornwall)
3. South (Hampshire, Berkshire, Wiltshire, Dorset)
4. South East (Kent, Surrey, West Sussex, East Sussex)
5. East Anglia (Cambridgeshire, Essex, Norfolk, Suffolk, Lincolnshire)
6. Oxford & Midland (Oxfordshire, Buckinghamshire, Berkshire, Hertfordshire, Bedfordshire)
7. Heart of England (Leicestershire, Northamptonshire, Warwickshire, Gloucestershire, Hereford and Worcester, Shropshire, Staffordshire, Derbyshire, Nottinghamshire)
8. North West (Cumbria, Lancashire, Merseyside, Great Manchester, Cheshire)
9. York & North East (Northumberland, Tyne & Wear, Durham, Cleveland, North Yorkshire, West Yorkshire, South Yorkshire, Humberside)
10. Scotland
11. Wales
12. N. Ireland

Fig. 1 イギリスのエリア別地図

Midlands Triangle」と呼び、14世紀の人口大移動の後、イギリス全体で比較的人口密度、富の集中度、教育程度が高く、Standard Englishを形成した地域とされる。

まず、地理的要因として、これら首都近隣地域のアクセントの急速な波及は交通機関の発達、とりわけ、ロンドンまでの通勤可能地域の拡張にあると考えられる。方言調査資料から (Trudgill 1990)、イギリスの北部から南部に伝えられたとされる英語の語彙である Manger (古くは Trough) がうまく南部の主要鉄道や幹線道路と一致して分布していることから、主要交通網がダイレクトに大きな影響を与えていることが推測される。

現在では、EEの勢力範囲はロンドンを中心に半径約200kmをカバーするようになり、北は Norwich を含む5番 East Anglia, 西は2番の Cornwall でさえまでも EE が拡大している様子が報告されている (Shoenberger 1999)。

逆にロンドンから地方への人口移動をロンドンアクセント拡張要因の1つと仮定すると、特に第2次世界大戦後ロンドン在住者が、比較的スペースが広く土地の価格が安い郊外に家を求め始めた事実も挙げる必要がある。

次に社会的要因として、階級社会の衰退と階級や職業など社会流動性が顕著になってきた事実が挙げられる。とはいえ、国家に対する貢献度の目安とし

て女王が年に2度、貴族の称号を国会議員や芸能界などを含める各界の要人に与えるイギリスでは、表面的な階級意識は、以前と少しも変化していない。過去に行われた国民意識調査の1項目に「Class Struggle」の有無についての質問があり、有とする者は1964年には48%であったが、30年後の1995年には81%に増加していた事実がある (McDowall 1999)。社会流動性については、1950年代を境に、それまで75%を占めていた労働者階級の割合が、現在では40%までに減り、逆にミドルクラス人口が急増した。イギリスの25%の富を占有する人口の約1%の上流階級のすぐ下に、ミドルクラス層が高収入・高学歴・結婚などの手段によって「スーパークラス」と呼ばれる新興アッパーミドルクラスを形成した。この常に上昇志向をもつミドルクラスの社会流動性が、同時に言語をも流動化したと言える。

また、文化的要因として、学校教育制度改革が挙げられる。イギリスでは、5才から16才までの12年間の無償義務教育 (5~6才: インファントスクール, 7~11才: ジュニアスクール, 12~16才: セカンダリスクール) があるが、かつては11才になると、「イレブンプラス」と呼ばれる試験を全生徒に課して、職業訓練組と進学組を能力別に分けていた。そして、全体の2割の進学組生徒はグラマースクールに入り、将来大学進学を目指し、17才以降も教

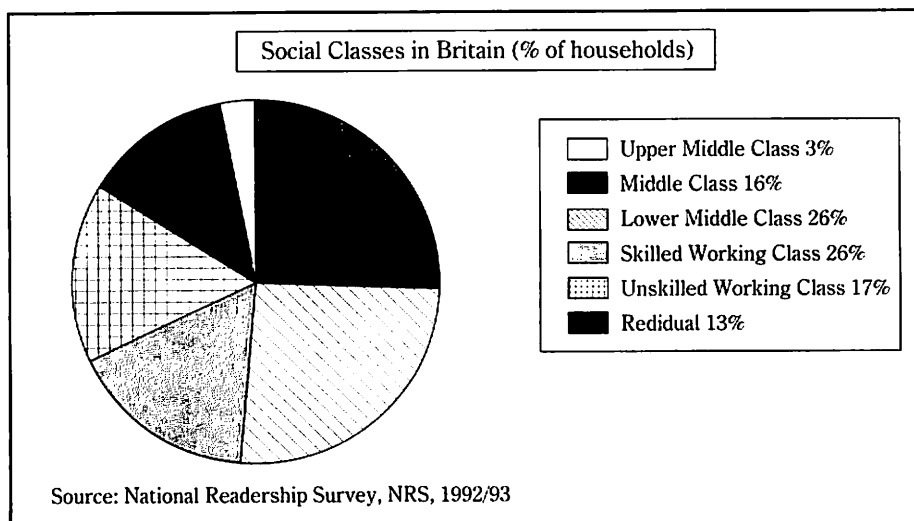


Fig. 2 イギリスにおける社会階級ごとの人口百分率

Age		Name	Maintain		Fee-paying	
3		Nursery	Nursery		Nursery	
4		Reception				
5	Compulsory Education	Year 1	Primary	Infant School	Pre-preparatory School	
6		2				
7		3				
8		4		Junior School	Preparatory School	
9		5				
10		6				
11		7	Secondary	Comprehensive School	Public School	
12		8				
13		9				
14		10				
15		11				
16		Lower 6th	Tertiary	6th Form	Further Education	6th Form
17		Upper 6th		Univ.		University
18						

Fig. 3 現在のイギリス教育システム（但し、進級の年齢区分などのシステムは、公立私立により、または地方自治体の教育委員会によっても異なることがある）

育を受ける。残りの8割の生徒が公立セカンダリーモダンスクールに入り、将来主に技術職、事務職につくための職業訓練的教育を受け、16才で社会に出る。

1965から1980にかけてこの2つのシステムをとる学校の多くが、Fig. 3のように、男女共学で無償のコンプリヘンシブスクール（総合中等学校）に統一された。その結果、現在では全国で約9割の生徒がコンプリヘンシブスクールで義務教育の最終段階を終えるようになった。そのため、コンプリヘンシブスクールでは、少数ではあるがRPを喋る生徒達と大多数を占める地方色アクセントをもつ生徒達が互いに影響し合うチャンスも必然的に多くなる。逆に、イギリスの私立学校（パブリックスクール）では、大多数を占めるRPを喋る生徒達と少数派の地方色アクセントをもつ生徒達が互いに影響し合う。その結果、どちらにしても、中立的アクセントが成立することになる。

アクセント変化の方向から言うと、それまでのRPを喋るとされた生徒達は、地方色アクセントを持つ生徒達の影響を受けて意識的にアクセントの「Downward化」を起こさせ、その主な理由は意識

調査によると、「グループにおける威信とたくましさ」を保つためであるらしい。逆に地方色アクセントを持つ生徒達は、RPアクセントの「洗練された話し方」を身につけるため、アクセントの「Upward化」を起こさせるように順応し、その結果「アクセントの収斂現象」が起こるようになった(Schoenberger 1994; Khlmyr 1996)。

最後に、EE拡大の情報技術的な要因として、ラジオやテレビなどの通信メディアによる影響も大きいことは言うまでもない。1995年に行われた調査(McDowall 1999)によると、イギリス人視聴者は1日平均3時間半テレビを見るらしい。その意味で、サテライト放送や、ケーブルテレビ導入によるアメリカ英語番組の豊富さに加え、国内では高視聴率を誇る長期人気シリーズ番組である、マンチェスターアクセントのCoronation Street (ITV, 視聴者約1730万人) やロンドンアクセントのEastEnders (BBC1, 視聴者約1580万人) などがブリティッシュの口語アクセントに日々与えている影響は大きい。特に、週末の子供番組のほとんどはスピードが速く、軽快で調子の良いEEをしゃべる司会者達によってすすめられている。

## Received Pronunciation (RP)

Daniel Jones (1918)は、RPを「英国南部の教養のある人々が喋る地方色のない標準発音」と定義しているが、かつては社会的、経済的に優位な立場にある一部特権階級が用いるダイアレクトとされてきた。また、教育の現場でもRPが用いられてきたためにBBC English, Queen's English, Oxford English, Standard Englishなどと一般に肯定的に広く受け入れられてきたダイアレクトと言える。その意味で、外国語としての英語を教授する場合、アメリカ英語に対してイギリス英語を代表するRPは、旧大英帝国植民地における公用語として使用され、また英語の教師にとって欠かせない資質になってきた(Bex 1994)。さらに、アクセントによる談話内容の信頼性に関してBBCが行った実験によると、West MidlandとRPのアクセントを比較した場合、明らかにRPの方が信頼性と説得力があるように報告されている(Ascherson 1994)。

RPは、Gimson (1980)によってさらにConservative RP (C-RP), Advanced RP(A-RP) General RP (G-RP)とその変化と話者の世代順に詳しく分類され、その変化の推移を早期に指摘している。C-RPは、伝統的にある一定の専門職や社会グループに属する老年層が用い、A-RPは、主に上流階級の若年層が用い、G-RPは、BBCのニュースなどの中で使われている典型的な「標準イギリス英語」とされる。後にWells (1996)は、C-RPおよびA-RPをUpper-crust RP (U-RP)とし、G-RPをUpper-middle-classまたはOxford Englishとして知られるMainstream RP (M-RP)と称した。上記2種類の他に、Adoptive-RP (言語修得期にRPを話さなかったが、後にRPを取り入れたたRP話者) およびNear-RP (若干の地方色アクセントを帯びているために、厳密にはRPではないが、「教養のあるミドルクラス話者」として受けとめられる意味で、限りなくRPに近い)を付け加えている。さらに、M-RP全体を通じて、Casual-RPや、Young-RPという下位範疇も使用している。人口比から見ると、Adoptive-RPやNear-RPが圧倒的に多いため、これら2つのカテゴリーをStandard English (SE)と呼ぶ研究者もいる

(Tatham 1999)。本稿では、WellsのRP (U-RP, M-RP), SE (Adoptive-RP, Near-RP)の4種類のRPを基準にしたい。

## Estuary English (EE) の呼称

Rosewarne (1984; 1994)が新しく分類したこの英語アクセントは、学术界をはじめマスコミにおいても物議をかもしている。学術的な論点の1つには、EEという新しいアクセント区分の存在自体を問う問題がある。この呼び名は新しいが古くから議論されてきた現象であり、Wells (1994, 1998)はEEをむしろ「London English」と呼び、その定義を「イングランド南東部地域を含むアクセント特徴でしゃべられる標準英語」としている。また、Maidment (1994)は「Post-Modern English」と称し、Rosewarneの「Estuary English」という呼称の不適切さを指摘している。そしてその主な理由を「社会言語学的な観点から、EEと呼ばれているアクセントが存在するとすれば、実際にテムズ河口沿でしゃべられているかどうか疑問であるし、そのアクセント自体がテムズ河口に由来するかどうかも確かではない。」としている。

Rosewarneは、現在のEEをアクセント的に、RPとCockneyの両極端アクセントの中間に置き、RPとCockneyの他に、主に英国南東部アクセントの影響を受けた「混合アクセント」と定義している。ただし、EEは、Cockneyと混同されやすいが(McKay 1996)、文法や表現が標準英語に従っているという点で、Cockneyと距離をおいて、EEとCockneyを区別する際の大きな手がかりとなる。同様に、EEとRPの境界線も極めてあいまいであるが、RPの特徴である「地方色を帯びていない点」が両者を区別する際の大きな決め手となる。

しゃべり方一つでその個人の階級、出身、教育程度がわかると言われるイギリスにおいて、「系統的な」アクセント変化はイギリス人が敏感にならざるを得ない問題である。その敏感さの一つの原因は、過去において上流、中上流階級の生活言語であったステータスシンボリックなアクセント、さらに英国内外の英語教師の基準となってきたこれまでのアクセ

ントが急速に変化しつつあるというところにある。EEを修得することによって、ある程度出身地域や階級をあいまいにすることができる点は、このアクセントの最大の社会言語学的魅力である。EEの存在自体の是非はともかく、この変化の方向は、明らかにRPからロンドンやロンドン近郊地域アクセントの方向に急速に向かって動いていて、英国南東部に広く浸透し、現英国の社会、経済の基盤を成す中流階級の生活言語アクセントと変わりつつある事実は否定できない。

### EEの音声特徴

Rosewarne (1984, 1994)やCoggle (1993)の記述によるEEの音声特徴は、言語学の専門家、特に音韻学・音声学からその具体的な資料の欠如のために、客観性に乏しい点が指摘されている(Maidment 1994, Wells 1994)。従って、以下に示す実際の発音上の特徴は、検証されたEE独自の特徴というよりは、現在のRP, EE, Cockneyのアクセントに関する言語学・音声学分野の専門家達の経験に基づく主観的な考察の結果である。

EEとしての特徴は、換言すれば、Cockneyなどの地域色を持つアクセントがRPに与えた影響の過程であり、影響を与えたCockneyなど自体の特徴から区別されなければならないが、その境界線の位置は明らかではない。しかし、音声学などの専門的立場から一般的に次の音韻特徴がEEアクセント、すなわち、Mainstream-RPの変化の過程で、影響を受けたアクセント特徴で、すでにアイデンティティーを確立していると考えられている項目である（\*印の項目は、まだEEやRPにも見られないアクセント特徴とされている）：

#### 子音の特徴

- C1) /t/の声門閉鎖化
- C2) /l/の母音化
- C3) /j/の脱落・結合同化
- C4) intrusive /r/
- \*C5) /h/の脱落
- \*C6) /ŋ/ から/n/への変化

\*C7) /θ, ð/ から /f, v/への変化

\*C8) /r/から/w/への軟口蓋化

#### 母音の特徴

V1) /i/ および /e/ への変化

V2) 2重母音のシフト

なお、以下の例の中で使用されている省略記号は次の通りである：

U-RP	Upper-crust RP
M-RP	Mainstream RP
SE	Standard English (Adoptive-RP, Near-RP)
RP	RP全体
A > B / X__Y	AはXとYの環境中でBに変化する
EE < Cockney	(アクセントの) 頻度はEEよりもCockneyの方が多い
#	語末尾

#### 子音特徴

C1) /t/の声門閉鎖化

a) t > ʔ / \_\_ C (子音直前の/t/の声門閉鎖化)

- 例) football /'fuʔbo:l/  
 (Casual M-RP < SE < EE < Cockney)
- quite good /'kwaiʔ gud/  
 (Casual M-RP < SE < EE < Cockney)
- atmosphere /'æʔmesfiə/  
 (Casual M-RP < SE < EE < Cockney)
- partly /'pɑ:ʔlɪ/  
 (Casual M-RP < SE < EE < Cockney)
- Gatwick /'gæʔwɪk/  
 (Casual M-RP < SE < EE < Cockney)
- mattress /'mæʔres/ (Cockney)

b) t > ʔ / \_\_ (V)# (語末尾・母音直前の/t/の声門閉鎖化)

例)

pick it up	/ˈpɪk ɪʔ ˈʌp/	
	(Younger M-RP < SE < EE < Cockney)	
start	/stɑ:ʔ/	
	(Younger M-RP < SE < EE < Cockney)	
bit	/brɪʔ/	
	(Younger M-RP < SE < EE < Cockney)	
belt	/belʔ/	
	(Younger M-RP < SE < EE < Cockney)	
bent	/benʔ/	
	(Younger M-RP < SE < EE < Cockney)	
best	/besʔ/	(Cockney)
twenty	/ˈtwenʔɪ/	(Cockney)

c) t > ʔ / V\_\_ V# (母音間の/t/の声門閉鎖化)

例) city	/ˈsɪʔɪ/	(Cockney)
matter	/ˈmæʔə/	(Cockney)
water	/ˈwɔ:ʔə/	(Cockney)

/t, d/が文末において、音声学的に「破裂」しないのは英語全体の特徴であるが、語中において/t/の声門閉鎖音が多発する現象は、英国北部地方、アメリカニューヨーク英語などにも現れ、EEだけの特徴ではないとされている。ただし、語頭に来る以外のほとんどに声門閉鎖化現象が見られる Cockney アクセントと比べると、EEの声門閉鎖化現象は比較的穏健である。その意味で、/t/の声門閉鎖化の控えめな頻度は、EEの特徴と言える。なお、Rosewarne (1984)によると、EEでは/d/にも/t/同様の声門閉鎖化現象が見られると報告しているが、Maidment (1994)によって否定されている。

語末・子音直前の/t/の声門閉鎖化現象の出現率は、Altendorf (1999)のロンドン在住の中学生を対象にした3種類のコンテクスト (インタビュー、文章朗読、語朗読) の調査によると、Cockney話者 (ロンドンの無償のコンプリヘンシブスクールの生徒) は、平均で96%の出現率であるのに対して、EE話者 (ロンドンの学費£1,000+のパブリックスクールの生徒) は、76%の出現率、RP話者 (ロンドン

の学費£3,000+のパブリックスクールの生徒) は、75%の出現率であった。一方、母音間の/t/の声門閉鎖化現象の出現率は、Cockney話者は、平均で70%の出現率であるのに対して、EE話者、RP話者ともに、0%の出現率であった。従って、語末・子音直前に起こりうるこの現象は、Cockney > EE > RP (出現率の高い順) すべてのアクセントに共通する音韻特徴と言えるが、母音間に起こりうる現象は、CockneyとEE・RPのアクセントに関する「境界特徴」と言える。

C2) /l/の母音化

a) l > w, o, u / \_\_ (C)# (語末尾や語末尾の子音結合中の/l/が/w,o,Uになりやすい)

例) myself	/maɪseɪf/	(SE < EE < Cockney)
tables	/teɪbɔz/	(SE < EE < Cockney)
milk	/mɪɹɔk/	(EE < Cockney)
middle	/mɪdɹɔ/	(EE < Cockney)

一般に、L-vocalisationと呼ばれているこの現象は、母音化というよりは、唇の丸まる特徴が加わる母音、半母音に変化すると言った方が正確である。英語における語末尾の/l/は、Dark /l/とも呼ばれ、/u/や/w/に似た音質になる。調音的には舌先が硬口蓋との接触を失い、若干後退するが、聴覚的にはDark /l/と大きな違和感はない。

L-vocalisationの出現率は、Altendorf (1999)の調査によると、Cockney話者は、平均で100%の出現率であるのに対して、EE話者は、95%の出現率で、RP話者は62%の出現率であった。従って、L-vocalisationは、Cockney > EE > RP (出現率の高い順) すべてのアクセントに共通する音韻特徴と言える。

Gimson (1980)は、RPでも唇音の環境が/l/を母音化させることを早くに指摘している。RPでは、一般に以下のような音韻環境下では/l/の母音化は起こらない。また、母音の長さを変えるようなニュートライゼーション (中和化) も起こらない。

主に、Cockneyに起こるとされるSyllabic-/l/の母音化の例：

例) little /lɪtlə/ (EE < Cockney)  
 middle /mɪdlə/ (EE < Cockney)  
 for example if /fə ɪg'zæmpl/ (EE < Cockney)

Cockney特有に起こるニュートラライゼーション  
 が起こる例：

例) fool - full /ful/ (Cockney)  
 real - reel /ril/ (Cockney)  
 feel - fill /fil/ (Cockney)  
 weld - world /weld/ (Cockney)  
 doll - dole /dl/ (Cockney)  
 pool - pull - Paul /pl/ (Cockney)  
 veil - Val /vl/ (Cockney)  
 dial - Dahl /dl/ (Cockney)

### C3) /j/の脱落・結合同化

- a) /j/ > ø/n, l, s/\_\_\_ [u:, +stress] (/n, l, s/直後の/u/に現れる/j/が脱落しやすい)  
 b) /j/ > ø/t, d/\_\_\_ (/t, d/直後の/j/が脱落しやすい)  
 c) /tj/ > /tʃ/ (/tj/が/tʃ/に結合同化しやすい)  
 d) /dj/ > /dʒ/ (/dj/が/dʒ/に結合同化しやすい)

a)の/j/音の脱落は、一般にアメリカ英語(GenAme)とイギリス英語を区別する際の特徴の一つであると考えられているが、EEがアメリカ英語から影響を受けていることは否定できない事実である。しかし、この/j/音の脱落特徴は、18世紀にはすでにロンドンアクセントの特徴として記述されている(Wells 1996)。一般的傾向として、a)の環境下においては伝統的RP(U-RP)では/j/音は残り、Cockneyでは脱落する。また、b)の環境下においてはCockneyでは脱落するか、それぞれ/tʃ, dʒ/に結合同化する。ただし、RPでも/j/音の後では高頻度で、/s/音の後では低頻度で、/j/音が脱落する傾向が定着しつつあることが報告されている(Schoenberger 1994)。

例) Tuesday /'tʃu:zdeɪ/ (U-RP)  
 /'tʃu:zdeɪ/ (SE < EE < Cockney)  
 /'tu:zdeɪ/ (Cockney, East Anglian)  
 duke /dʒu:k/ (U-RP)  
 /dʒu:k/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 /du:k/ (Cockney, East Anglian)  
 news /nju:s/ (RP < SE < EE)  
 /nu:s/ (Cockney, East Anglian)  
 revolution /revə'lu:ʃn/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 what you /'wɒtʃu:/ (U-RP)  
 /'wɒtʃu:/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 did you /'dɪdʒu:/ (U-RP)  
 /'dɪdʒu:/ (M-RP < SE < EE < Cockney)

### C4) Intrusive /r/

非高母音 /ə, ɪə, ɑ:, ɔ:/ の後に母音が続く場合、/r/が割り込むことが多い。ただし、/ɔ:/の後で/r/を割り込ませるRP話者はまだ少ない。

語境界を越える場合

例) shah of Iran /ʃɑ:rəv/ (RP < SE < EE < Cockney)  
 spa and /spɑ:rənd/ (RP < SE < EE < Cockney)  
 comma in /kəməɪn/ (RP < SE < EE < Cockney)  
 vanilla ice-cream /vənɪlərɪs/ (RP < SE < EE < Cockney)  
 idea of /aɪdərɪəv/ (RP < SE < EE < Cockney)  
 saw it /sə:rɪt/ (EE < Cockney)



語境界を越えない場合

- 例) magentaish /mædʒentəɪʃ/  
 (RP < SE < EE < Cockney)  
 withdrawal /wɪðdrɔːrəl/ (Cockney)  
 sawing /sɔːrɪŋ/ (Cockney)

C5) h > ø

Cockneyアクセントを代表する特徴の1つでもあり、RPにも見られる現象でもある。語頭、語中に現れる/h/が落ちる傾向がある。この脱落現象は、すでに歴史的に確立しているwhで始まる疑問詞や、機能語のWeak form /h/(him, her 等)の脱落を意味するものではない。Cockneyでは時折、/eɪtʃ/のように歴史的に/h/がない場合でも、ハイパーコレクション(過剰訂正)の結果/hartʃ/と発音してしまうことがある。

- 例) hammer /'æmə/ (Cockney)  
 hedge /'edʒ/ (Cockney)  
 behind /br 'aɪnd/ (Cockney)  
 I have /aɪ 'æv/ (Cockney)

H-droppingの出現率については、次に示すような社会階級、性別を対象にしたHudson & Holloway (1977)の行ったアクセント調査資料がある(地域: London)。

Fig. 4からも明らかなように、ロンドンの中でも階級によって、ほぼ4倍の頻度でH-droppingが起こることがわかる。また、男女間の差異も大きく、男子生徒の方が女生徒に比べて中流階級では2.3倍、労働者階級では4.5倍にも及ぶ。

C6) ɪŋ > ɪn, n

ingの軟口蓋音の歯茎音化は、書記体にまで影響を現している場合がある。

- 例) working /'wɜːkɪn/ (Cockney)  
 reading /'riːdɪn/ (Cockney)  
 running /'rʌnɪn/ (Cockney)  
 morning /'mɔːnɪn/ (Cockney)

ingの歯茎音化の出現率については、次に示すような社会階級、性別、コンテキストを対象にしたTrudgill (1974)のアクセント調査資料がある(地域: Norwich)。

Fig. 5から明らかなように、まず、中流クラスと労働者階級クラスの間には顕著な差が見られ、社会階級別にもうまく歯茎音化が伸張していることがわかる。また、男女間の差については、Trudgill (1974)が早くに指摘しているように、女性の方が穏健である。

次に、スタイル別に歯茎音化現象を見た場合、朗

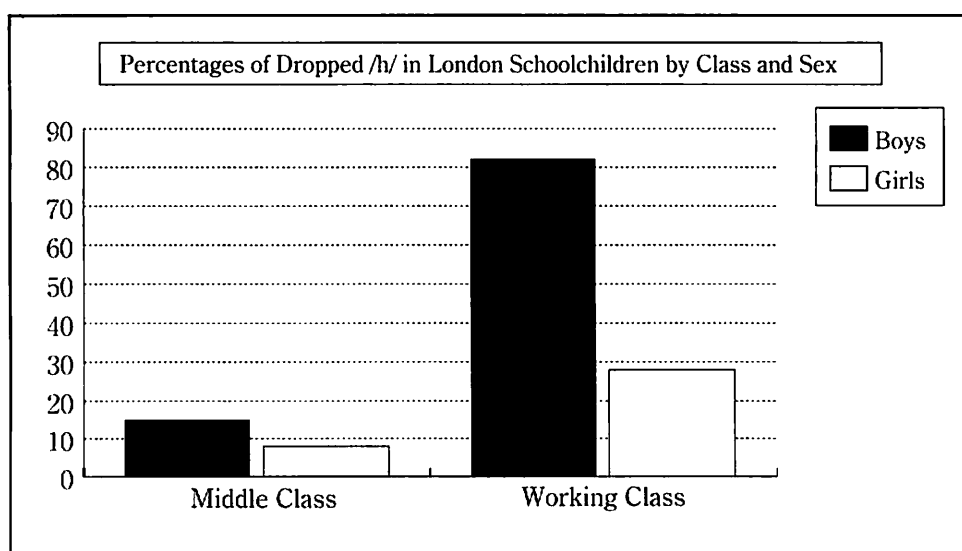


Fig. 4 ロンドンにおけるH-droppingの階級・性別出現率 (Hudson & Holloway 1977)。

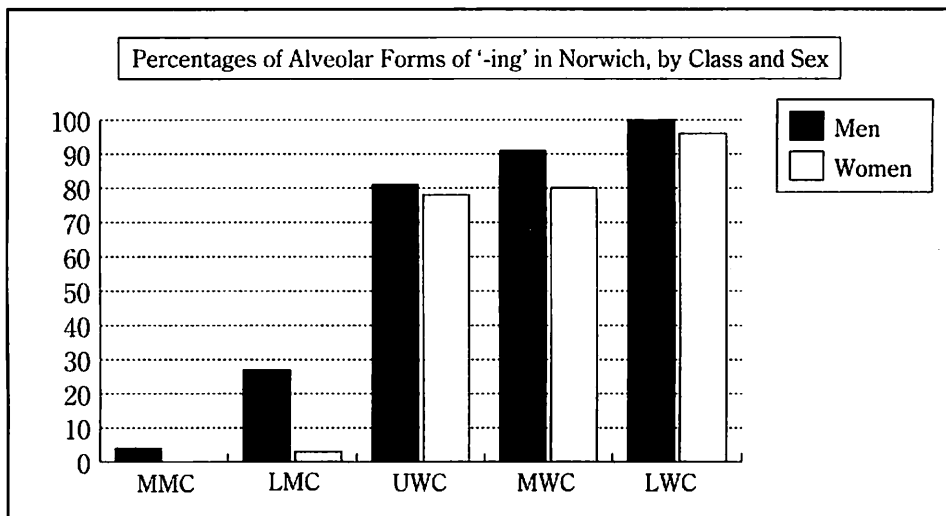


Fig. 5 Norwichにおける'-ing'の歯茎音化の階級・性別出現率 (Trudgill 1974)。MMC(Middle Middle Class), LMC(Lower Middle Class), UWL(Upper Working Class), MWC(Middle Working Class), LWC(Lower Working Class)

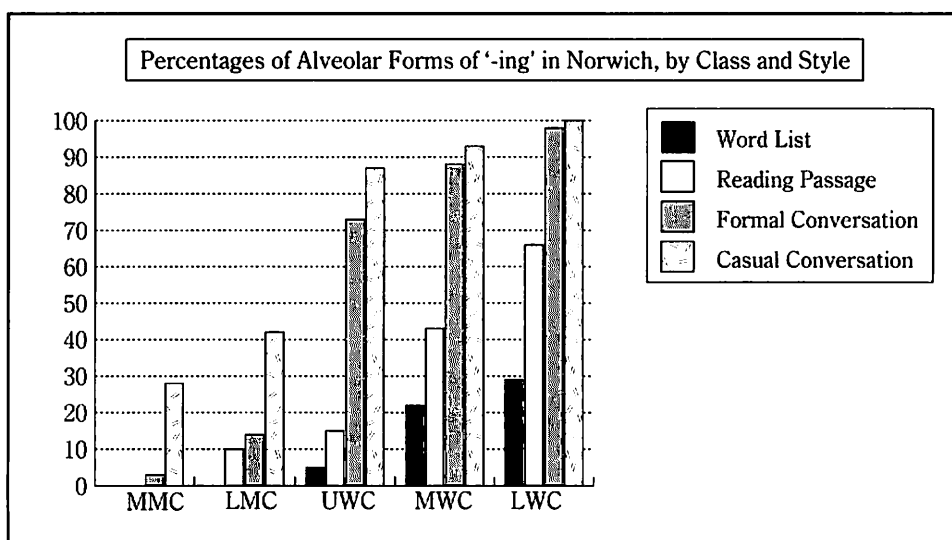


Fig. 6 Norwichにおける'-ing'の歯茎音化の階級・スタイル別出現率 (Trudgill 1974)。

読スタイルと会話スタイルの間に大きな差異があることがわかる。そして、その割合も社会階級があるほど大きくなる一般的傾向がうかがえる。また、会話スタイルのフォーマル・カジュアル間でも同様の傾向が見られ、特に中流階級では、歯茎音化の絶対頻度は少ないが、その傾向が顕著である。

C7) θ, ð > f, v

一般に、「TH-fronting」と呼ばれているこの現象は、Cockney 独自のものとみなされている。Altendorf (1999)の調査によると、Cockney 話者は、

インタビュー、朗読文章、単語単位の平均で、約66%の出現率であるのに対して、EE 話者は、7%の出現率、RP 話者は、1%の出現率であった。従って、TH-frontingは、Cockney と EE の境界特徴と言える。

例) I think /aɪˈfɪŋk/ (Cockney)  
mother /ˈmʌvə/ (Cockney)

C8) r > w

Rosewarne が主張する /r/ 音の軟口蓋化 /w/ は、EE

独特の特徴というよりは、個人の癖であるように報告されている (Maidment 1994)。確かに、子供の頃に多く見られるこの癖をそのまま大人になっても使う人はいるが、この現象は、EE 以外でも、英語圏であればどこにでも起こりうる。たとえば、アメリカの Cartoon で /ræbrɪt/ のことを /wæbrɪt/ と発音している大人のキャラクターがいるが、聴覚的な違和感は大い。

母音

V1) /i/ および /e/ への変化

a) /ɪ/ > /i, i:/ \_\_\_ #, V (文末や母音直前において、母音が引き延ばされたり 2 重母音化する傾向がある。)

- 例) happy /'hæpi, 'hæpi:/ (SE < EE < Cockney)  
 coffee /'kɒfi, 'kɒfi:/ (SE < EE < Cockney)  
 radiate /'reɪdiət/ (SE < EE < Cockney)  
 various /'veəriəs/ (SE < EE < Cockney)

「Happy Y」(Ramsaran 1990b; Winsor 1990) に代表される変化であるが、文末や母音直前の /ɪ/ の非弱化が起こる現象である (Wells 1996)。この傾向は、ロンドン北東部の Essex や GenAmE でも見られる。

b) ɪ > e / \_\_\_ C (子音直前において、/ɪ/ 母音が /e/ に弱化する傾向がある。)

- 例) careless /'keələs/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 goodness /'gʊdnəs/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 university /ju:nɪ'vɜ:səti/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 luckily /'lʌkəli/ (M-RP < SE < EE < Cockney)  
 immediate /ɪ'mi:diət/

(M-RP < SE < EE < Cockney)

needed /'ni:dəd/

(M-RP < SE < EE < Cockney)

services /'sɜ:vɪsəz/

(M-RP < SE < EE < Cockney)

leaflet /'li:flet/

(M-RP < SE < EE < Cockney)

c) u, ʊ, jɔ:, əu > e

(/u/, /ʊ/, /jɔ:/, /əu/ 母音が /e/ に弱化する傾向がある。)

例) ambulance /'æmbjələns/

(EE < Cockney)

educate /'eɜ:kəɪt/ (EE < Cockney)

manufacture /mænʃə'fæktʃə/

(EE < Cockney)

see you /'si: jə/ (EE < Cockney)

window /'wɪndə/ (EE < Cockney)

pillow /'pɪlə/ (EE < Cockney)

V2) 2 重母音のシフト

eɪ > aɪ pay, eight, make

(EE < Cockney)

aɪ > aɪ my, eye, fine (EE < Cockney)

ɔɪ > oɪ choice, toy (EE < Cockney)

əʊ > ʌʊ, æʊ goat, owe, boat

(EE < Cockney)

> \*ɒʊ roll, mole (EE < Cockney)

aʊ > a: mouth, south (Cockney)

ɪə > i: real (Cockney)

aɪ > a: dial (Cockney)

\* /əʊ/ は、dark /l/ の直前では /ɒʊ/ に変化するのが EE の特徴であるように報告されている (Maidment 1994)。

イントネーション

Rosewarne (1984) によると、次のような EE のイントネーション特徴が指摘されている：

1) EEは、RPよりピッチの変化(特にピッチ上昇が)小さいため、聴覚的には平坦で情緒や感情の高ぶりが感じとりにくい。

2) RPでは、内容語と呼ばれる語の音節に音調核が来るのが普通であるが、EEではしばしば機能語と呼ばれる語、たとえば前置詞や助動詞に音調核が来ることがある。

3) L\*H+L(上昇下降音調核)が多用されるため、付加疑問文などの意味に影響を与えることになる。

しかし、これらRosewarneの指摘した上記EEのイントネーション特徴は、Maidment(1994)によってその具体性と客観的データの欠如のために否定されている。

#### 語彙レベル

Rosewarne(1994)やCoggle(1994)によると、次のようなEEの語彙・慣用語句の特徴が指摘されている:

- 1) 「Cheers」が「Thank you」や「Goodbye」の意味で使われる傾向がある。
- 2) 間投詞的な「Basically」が頻繁に使われる傾向がある。
- 3) 「There you are」が「Here you are」の代わりに使われる傾向がある。
- 4) 主語の単・複数形にかかわらず、「There is ...」が使われる傾向がある。
- 5) 以下のような慣用表現を含むアメリカ英語が広範囲に使われる傾向がある。
  - a) 「Excuse me」 > 「Sorry」
  - b) 「Who's speaking?」 or 「Who's that?」 > 「Who's this?」

しかし、これらの特徴もWells(1994)などの調査資料などによってその「EEというアクセント地域限定」の妥当性に疑問が投げかけられている。

#### 文法レベル

Wells(1998b)は次のような文法レベルの項目を挙

げ、1)～7)のような例は、現在ではCockneyばかりではなくイギリス全体で広く使われている「Popular English」になっていることを指摘している。

- 1) 多重否定      ain't never done nothing.
- 2) 動詞の形態      You seen 'im! - I never! They done it. You was.
- 3) 再帰代名詞      'E'll 'urt 'issself. That's yourn. Them books.
- 4) 指示詞              Them books.
- 5) -lyなしの副詞      Trains are running normal. The boys done good.
- 6) 前置詞              down the pub, up her nan's, out the window, off of
- 7) 所有格代名詞      Where's me bag?

#### まとめ

RPは、社会・経済的にはピラミッドの頂点に位置し、地理的にはイギリスに根ざすがイギリスだけのものではない。また、イデオロギー的には正しく「中立?」で、実用的にはEFLとして外国語教育の現場で教えられている。RPを社会的地位スケールの一方の端に置くとすれば、もう一方の端にはCockneyが来る。そしてCockneyは上記の肯定的なRPのちょうど逆の価値観を与えられることになる。イギリスでは、1994年に、当時の文部大臣Gillian Shephardが、EEを「だらしがない、聞き取りにくい、Cockneyまがい」とし、さらに「教師は全力をあげてEEを根絶させなければならない。」とも述べている(Wells 1997)。このイギリスの無形財産ともいうべき標準英語が今現在急激に変化しつつある。1つはRP内部からの変化であり、もう1つは外部からの影響である。

EEは、そのような状況の中で形成されてきたロンドン風のアクセントである。EEが影響を受けているそのアクセント源であるCockneyの特徴の中の幾つかがすでにEEの中に取り込まれている。例えば、/t/の声門閉鎖化、/l/の母音化、/tj, dj/の結合同化、/ɛ/の緊張音化、2重母音のシフトなどである。この傾向は、男性の若者のカジュアルなスピー

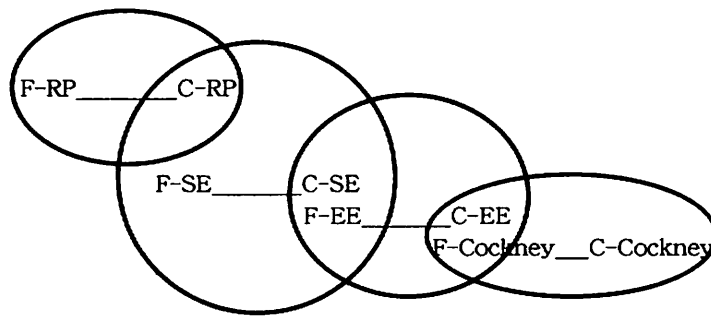


Fig.7 RP (Upper-crust RP, Mainstream-RP), SE (Standard English), EE (Estuary English), Cockneyの社会言語学的な位置関係。各アクセントは、隣接するアクセントにF (Formal), C (Casual) の部分で重なり合う。

チほど強くなり、その範囲はすでにイギリス南部全域に浸透しつつあるとよい。

本稿は、筆者が1998年9月から1年間、英国エセックス大学言語・言語学部音声研究所において客員研究員 (Research Fellow)として学外研究中、資料収集、および方言の音声観察を行いその結果をまとめたものである。

#### 参考文献

- Altendorf, Ulrike [1999] 'Estuary English: Is English Going Cockney?', <[www.phon.ucl.ac.uk/home/home/estuary/home.htm](http://www.phon.ucl.ac.uk/home/home/estuary/home.htm)>
- Ascherson, Neil (1994) 'Britain's crumbling ruling class is losing the accent of authority', *The Independent* on Sunday 07-08-1994
- Bex, Tony (1994) 'Tony Ben takes issue with Gillian Shephard and her recently aired objections to English as she is spoken' from *The Guardian* (Education section), London, 6 September 1994
- Cogle, P. (1993) *Do you speak Estuary?* London: Bloomsbury
- Crystal, D. (1995) 'The Cambridge Encyclopedia of The English Language', Cambridge University Press
- Gimson, A. (1980) 'An Introduction to the Pronunciation of English', 3rd Edition, London: Edward Arnold
- Hudson & Holloway (1977) 'English Accents and Dialects', 4.1
- Jones, D. (1918). *An Outline of English Phonetics*. Cambridge: Heffer
- Khlmyr, P. [1996] 'Estuary English: Who speaks EE?', <<http://www.sfs.nphil.uni-tuebingen.de/linguist/issues/7/7-1366.html>>
- Maidment, J.D. (1994) 'Estuary English: Hybrid or Hype?' Paper presented at the 4th New Zealand Conference on Language & Society, Lincoln University, Christchurch, New Zealand
- McDowall, David (1999) 'Britain in Close-up, An In-depth Study of Contemporary Britain', Longman
- McKay, Sinclair (1996) 'I believe in Estuary English', *Daily Telegraph*, London, 16 November 1996
- Ramsaran, S. (ed. 1990a) 'Studies in the Pronunciation of English,' London: Routledge
- Ramsaran, S. (ed. 1990b) 'RP: fact and fiction', In Ramsaran, S. (1990).
- Rosewarne, D. (1984) 'Estuary English: David Rosewarne describes a newly observed variety of English pronunciation'. *The Times Educational Supplement*, 19 October 1984
- Rosewarne, D. (1994) 'Estuary English: tomorrow's RP' *English Today*, 37. 10. 1 January 1994, 3-8
- Shoenberger, F. [1999] 'Update on English Language and Culture: Estuary English' <<http://w100.padl.ac.at/LuF/e/est01.htm>>
- Tatham, M. [1999] 'Accents of English: Estuary

- English II,' Teaching Notes, <<http://speech.essex.ac.uk/speech/teaching/lg474/lg474-98-8.html>>
- Trudgill, P.(1974) 'Sociolinguistics: an Introduction', Penguin.
- Wells, J.C. (1994) 'Transcribing Estuary English', Speech Hearing and Language: UCL Work in Progress, Volume 8, pps 259-267
- Wells, J.C. (1996) 'Accent of English 2: The British Isles', Cambridge University Press
- Wells, J.C. [1997] 'What is Estuary English?', In: English Teaching Professional, issue 3, pp. 46-47. <<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuarywhatis.htm>>
- Wells, J.C. (1998a) 'Estuary English?!?', Sociolectal, chronolectal, and regional aspects of pronunciation: Symposium in Lund 9 May 1998.
- Wells, J.C. [1998b] 'Week 5. Cockney (iii): and Estuary English' from PLINX202 English Accent(X202/08/5L), J. C. Wells home page
- Winsor, L.J. (1990) 'Happy Y land reconnoitered: the unstressed word-final -y vowel in General British pronunciation', In Ramsaran, S. (1990a). [ ]は、インターネットの資料を示す。